



それから、水をポンプで送り込みます。その後蒸した米を「放冷機」に乗せて「シューター」を使って仕込みタンクに送り込みます。
この最初の仕込みを、初添えと言います。



初添えから3日目(仲添え)と4日目(留添え)にもう一度「水、麴、蒸し米」を送って仕込みは終わりです。
それから、3週間ぐらいで「もろみ」が出来上がります。

その5 お酒のビン詰め



出来上がった「もろみ」を「自動圧搾機」で絞ると、お酒になります。



みなさまの家庭から、リサイクルで回収してきたビンをきれいに洗います。



洗い終わったビンを、傷や汚れがないか検査します。



お酒を「ビン詰機」でビンに詰めていきます。



ビンに蓋を乗せながら、製品を検査していきます。



ビンの蓋を締めていきます。



最後にラベルを貼って出来上がりです。

③-4 「箸蔵寺の大祭」

箸蔵寺の大祭は、4月12日と11月12日の2回行われている祭礼行事である。

大祭は12時半より練り供養が行われる。法螺貝、ドラの音とともに4歩進み立ち止まるを繰り返しながら計276段の階段を、僧侶が本坊から御本殿までを練り歩く。過去の大祭では、稚児が昇り、次いで僧侶が昇っていた時期もあった。

御本殿では、信者各位の願いを叶えるため、般若経を唱えながら経本を上から下へと転がすように読む方法である大般若転読大法要が行われる。

法要が終わった後は、「散餅の儀」で餅投げが行われる。この餅投げでは、近年、木札が入っているものもあり、生活用品と交換されるものなどもあり、賑わいが見られる。

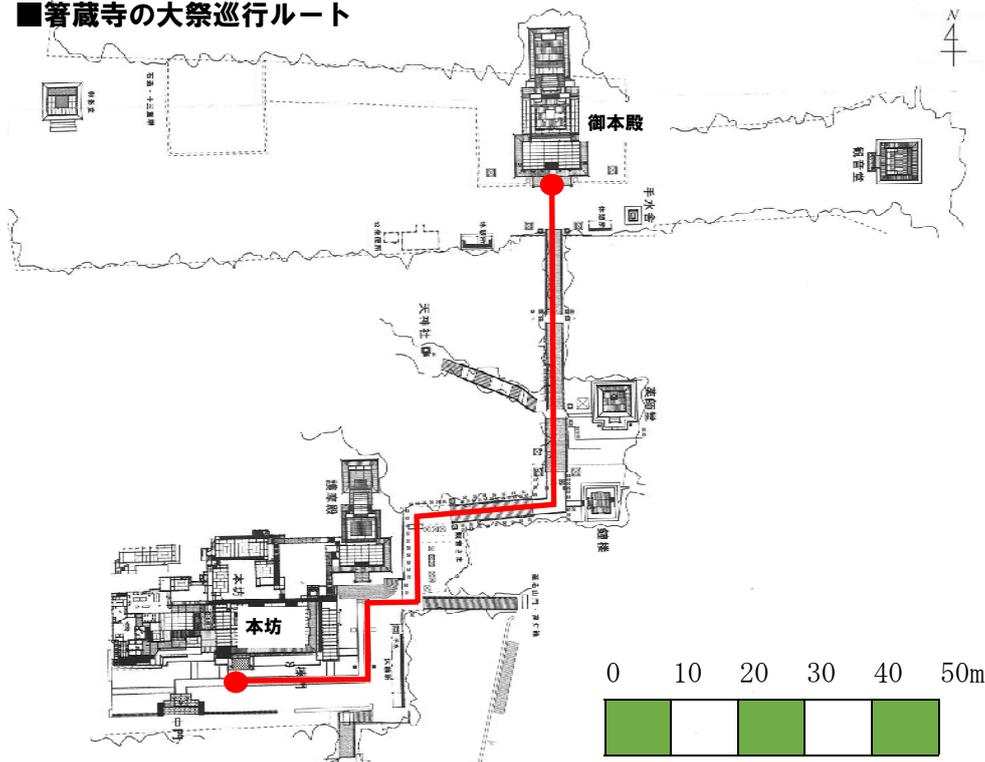


■本坊から巡行する様子



■大祭で練り歩く稚児（昭和31年）

■箸蔵寺の大祭巡行ルート



③-5 「灯笼流し」

灯笼流しが行われている場所は、かつて舟が人や物資を運び、交通の主役として利用されていた吉野川水運の港であった「はまの跡」である。

『池田町誌』（昭和37年発行）によると、灯笼流しは毎年8月30日に行われ、この行事には箸蔵寺と、その檀家も携っており、檀家の多くは、池田町と井川町の大正から明治にかけて、水上の安全の神としての信仰が深かった水運業者、商売繁盛を祈願」されてきたタバコ製造業者をはじめとした商家が多い。

灯笼とは、1年の間に亡くなった方の初盆に灯笼に火を灯して迎える。これはお葬式の時、仏様の力で極楽に導かれた方が、初盆で初めて自分で里帰りをする際に、迷うことがないようにと行われている。

灯笼には亡くなった方の戒名が書かれた紙の幡が貼り付けられ、それに夜通し灯を入れて、暗いときでもよく見えるようにしている。昔は外からよく見えるように、軒下や縁側に吊されていたが、最近では家の中の窓際に吊すことが多い。箸蔵寺の僧侶は、灯笼を初めて吊す「灯笼上げ」の日と、灯笼を外す「灯笼下ろし」の日に、檀家の家に灯笼を拝みにいく（または来てもらう）。灯笼が外された後は、家族や親族の手によって無事にあちらの世界に送る「灯笼流し」が行われている。



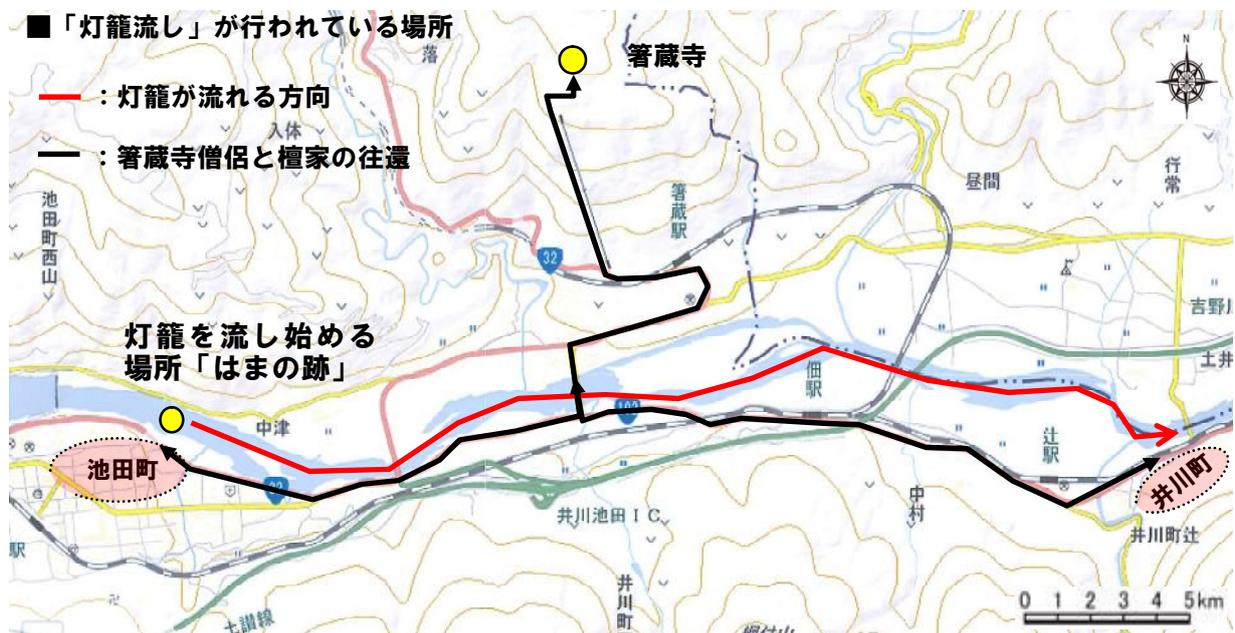
■大正初期の「はまの跡」



■現在の「はまの跡」



■灯笼流しの様子



③-6 「今宮神社の秋の大祭」

今宮神社は井川町の辻のほぼ中心部に
かすがじんじゃ
ある。この地域では珍しい春日神社形式
を取り入れた立派な建築様式である。

祭りは、とおかえびす「十日戎」の1月10日と、
秋の大祭10月31日の年2回行われ
る。十日戎には「福投げ戎祭り」とも呼
ばれる商売繁盛の祈願が行われ、秋の大
祭には神輿が出され辻の町を巡行する。
巡行順路は大当屋である、本町・仲ノ
町・坂町・浜ノ町・井関・新町の組によ
り変わる。大祭は今宮神社から神輿を
担ぎながら巡行し、山下家別邸をはじめ
各家や各組の前で、家内安全等を願うた
め「わっしょい」の掛け声と共に、神の
力を高めるために激しく揺さぶりながら
練り歩く。

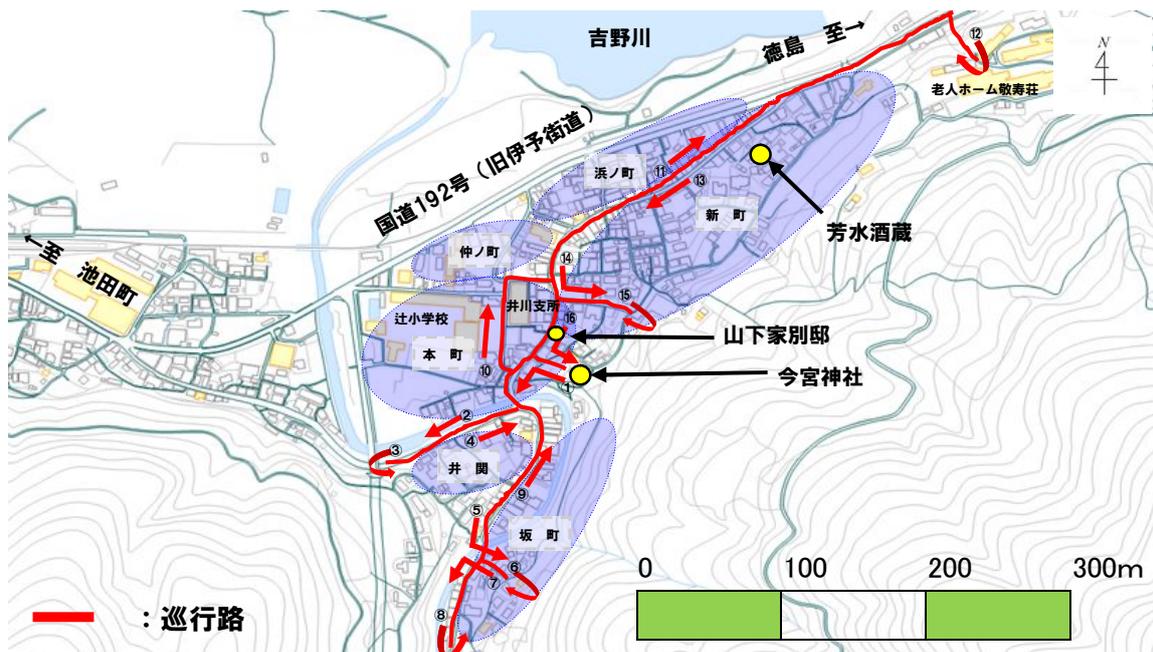
大祭は古写真から、少なくとも大正5
年頃より行われていたことがわかる。



■本町での神輿担ぎの様子



■今宮神社大祭での記念撮影（大正5年頃）



①～⑬：順路（年によって、若干変更されることもある。）

③-7 井川町西井川の棚田の稲作

井川町で見られる棚田での稲作は『井川町誌』（昭和57年発行）によると、江戸時代に人口の増加と租税のとり立てが厳しくなったことによって、新田開発が盛んに行われ低地部にまで競って求めるようになったことで開拓されたと記されている。

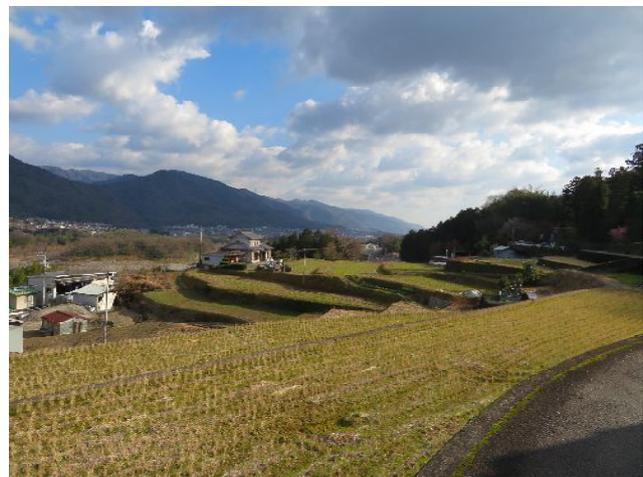
また、その当時の住民は、吉野川等の水害に合わないよう低地で住むことはなく高地で住む「通い農作業」であったという。

時代が進むにつれ、伊予街道（現192号線）が開通したことによって、旅人や農民を相手にした商家が立ち並び大型の街村型の集落（現井川町の町並み）ができ、経済の発展に伴い農業はタバコ耕作や養蚕業による桑園などが増加したことにより稲作農家は減少し井川町での農家はごくわずかとなっている。

こうした棚田による稲作は、市街地外での農村集落の原風景を今に残している。



■箸蔵寺の対岸に位置する西井川の農村集落



■西井川の棚田



■石垣の修理は今も手積みで行われている

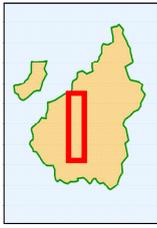
④吉野川中流域に残る歴史的風致（池田町及び井川町）のまとめ



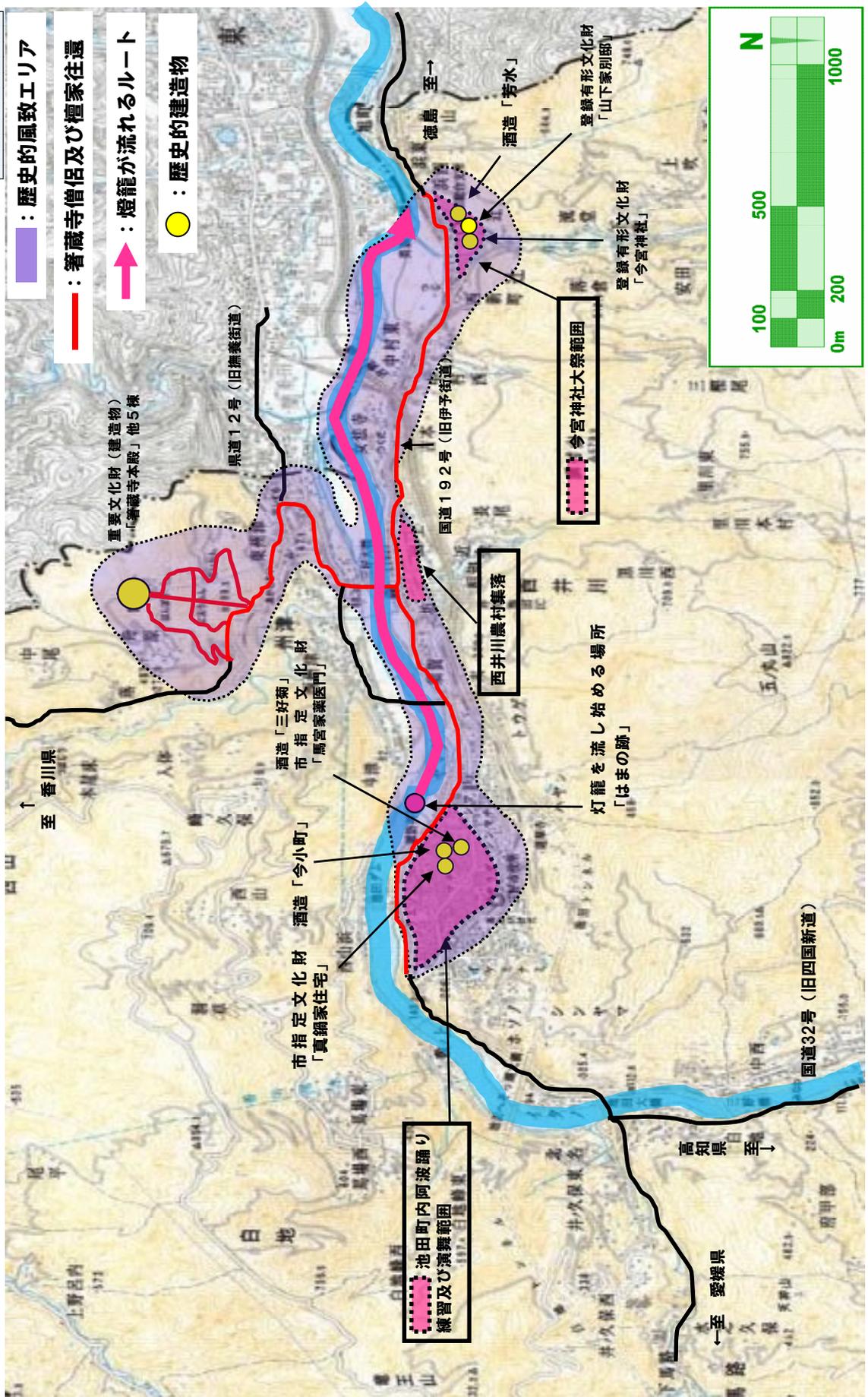
■池田町と吉野川（池田町西山集落より展望）

池田町と井川町に、伝統的な町並みが形成された背景には、吉野川水運とタバコ産業が深く関わっており、タバコ的一大産地として栄えた池田町と井川町で製造される「刻みタバコ」は全国的に広がり、販路が拡大され未曾有の繁栄をこの地域にもたらした。町並みは、タバコだけでなく酒蔵や呉服屋といった商屋で主に形成されていき、今に見ることができる。また、市街地外では農村集落が点在し棚田などの田園風景が見られる。

当時から、箸蔵寺や今宮神社等は安全の神、商売繁盛、家内繁栄と働く人々の心の拠りどころとして信仰が行われきた。奉納者の多くは池田町と井川町の商家の名が刻まれており、こうした信仰心は伝統的な年中行事として受け継がれ、神社等の例祭や、夏のお盆の吉野川での灯籠流しが行われ、町中では阿波踊りが行われるなど、年中行事と町並みなどが一体となった歴史的風致が形成されている。



■吉野川下流域に残る歴史的風致（池田町及び井川町）
 ・風致エリアは、池田町及び井川町の人々の信仰を集めた箸蔵寺と、うだつの町並み及び阿波踊り等の活動範囲をエリアとする。



コラム【水運】

●吉野川水運の跡

池田町の町並みの高台にある諏訪神社下の川原には、江戸時代から大正にかけて栄えた「はまの港」と呼ばれる川港があった。

陸上交通の不便な当時は、^{ひらたぶね}平田舟という帆かけ船が吉野川を行き来し、下りの積荷は、阿波刻みタバコ、木炭、^{あい}三楹、藍等で、上りの積荷は、米、小豆、塩、海産物等であった。

明治9年（1876）の記録では池田大西町に31隻の平田舟があり、町には船宿も多かったようである。

また、井川町の辻の川原にも「辻の浜」と呼ばれる川港があり、明治9年の同記録では、池田大西町を凌ぐ25隻の平田船が辻の浜にあったとされる。

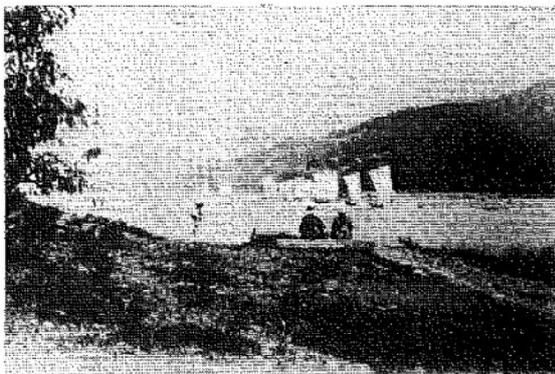
近くの今宮神社は、明治初年までは小さなお社であったが、刻みタバコ工場主の寄付で現在の立派な社殿に建て替えられた歴史があり、神社の石段と玉垣にも刻みタバコ工場主の名が刻まれ、タバコ産業の繁栄を伝える記念碑となっている。



■池田町の川港「はまの港」跡



■井川町の辻の川港「辻の浜」跡



■平田船



■井川町の辻の川港「辻の浜」での舟渡しの様子

コラム【井川町が栄えたもう一つの理由】

●水力発電所

全国的な工業の発展に伴い、電力の需要が増大していく中で、井川町に水力発電所の計画があがった。

昭和26年（1951）、四国電力(株)は世の中の要請にこたえ、松尾川を電源開発の適地として計画を進めた。当時の送電計画として「三庄」案（現東みよし町）と「井川町の辻」案^{さんしょう}の2つがあった。この間には井川町の辻と井内谷村が手を組んで、発電所の誘致運動に力を入れた。これには三庄村、加茂村（現東みよし町）もこれに負けずに誘致運動を行い、活発な誘致合戦が行われたが最後には「井川町の辻」で決定した。

昭和26年の夏より工事の準備が進められ、工事用のための道路補修や、索道の架設工事など着々と進み、井川町は労働者であふれた。労働者達は一般家庭に下宿し、工事業者の幹部が旅館や一般家庭に下宿し、食堂も多くできた。

これにより井川町で仕事がなく困っていたものは、労働に雇われ現金収入が得られた。また商店も労働者の増加により食料品や日用品がよく売れ、さらには多額の税金を得ることができて、町村費も裕福に使えたという。



■松尾川水力発電所



■井川町の辻と発電所の位置

5 吉野川支流河内谷川に残る歴史的風致（三野町）

①地域の歴史

三野町は三好市の東端に位置し、北は讃岐山脈に奥深くのび、香川県の仲南町や琴南町と境を接し、南は吉野川の清流を挟んで三加茂町や半田町に接する。中心を背骨のように河内谷川が流れ、それに松尾谷川や大屋敷谷川などが流れ込んでいる。北の讃岐山脈の山地が町の7割近くをしめ、山麓には扇状地が発達し、谷川は殆ど水の流れていない空谷で、扇状地の下をわずかの伏流水が流れ出ている。水の豊かな吉野川を見下ろして水には悩まされた土地であり、文化3年（1806）には、大干ばつによって、芝生・勢力・加茂野宮集落の村民は稲作不調により餓死状態まで追い込まれた。

状況を打開するため村民達は、三野町最大河川「河内谷川」からの導水に着手し「三村用水」を完成させている。現在もこの用水は使用されており、分水表により、芝生・勢力・加茂野宮集落の水田に分配されている。こうして三野町は県西部でも有数の稲作地帯となっている。

水に悩まされる土地であるが、町の歴史は古く、縄文・弥生時代から人は住み着いたようで、町からは住居跡の遺跡等が発見されており、大塚古墳や桶川古墳などの古墳も残されている。

また古代の阿波は粟の国と長の国の二国以外に三好・美馬を中心にもう一つの国があったと言われるくらい開発が進んでいたようであり、三野町には中世後期の城跡が多く残されており、清水城、加茂野宮、屋形山城、芝生城等がある。



■香川県から眺めた三野町



■三野町の最大河川で中心を流れる河内谷川

②地域に見られる歴史的建造物

②-1 三村用水と溜池

三野町は讃岐山脈を背に日当たりがよく、気候は温暖で稲作に適していた環境であったため、多くの溜池があり各集落の水田に分配されている。

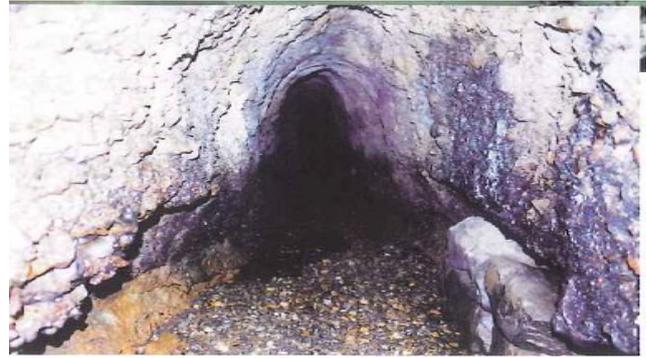
山麓には扇状地が発達し、谷川は殆ど水の流れていない空谷であったため溜池が多くあるが、溜めるのは雨水だけでは足りないため、伏流水を汲み上げ溜めるため文化5年（1808）に三面石組みの開渠水路162m、文政10年（1827）には隧道（トンネル）水路を引き三村用水を完成させ、この

用水により溜池へ水運び、芝生・勢力・

加茂野宮集落のおよそ140haもある水田

に水が分配されている。

こうした先人たちの知恵と努力から、三野町は徳島県西部一の稲作地帯となっている。



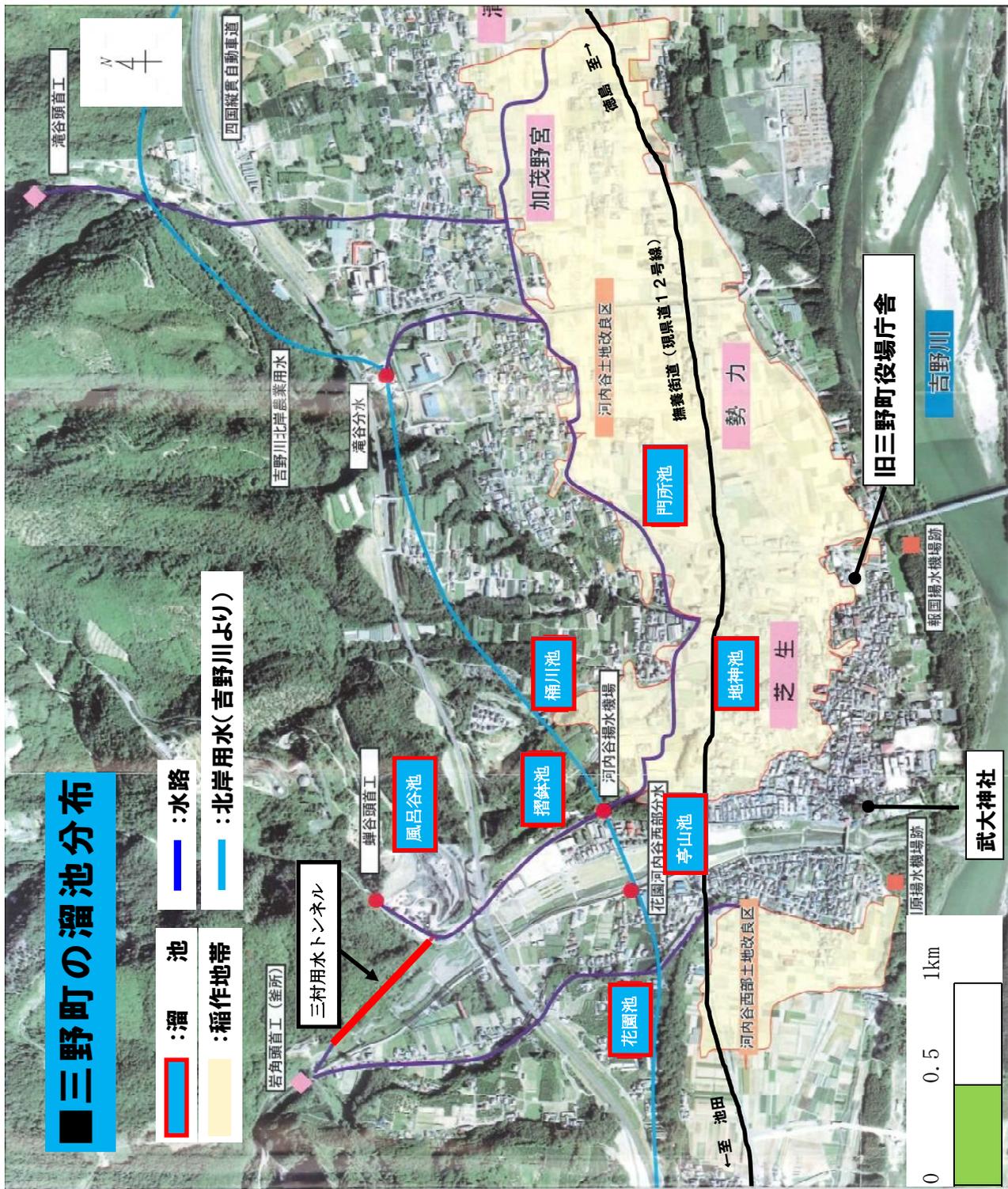
■三村用水トンネル



■門所池(文久元年築(1861)・勢力・加茂野宮地区用調整池)



■地神池(築年代不詳・芝生地区用調整池)



②-2 登録有形文化財

「旧三野町役場庁舎」

旧三野町役場庁舎は、三野町中心部にある「武勇以て安息大をなす厄難疫除」の守護神社を意味する武大神社の近くに建っている。

建築年代は昭和9年築の建物で、建築形式には、半円アーチ窓も設けるなど大正期の洋風建築を用いた建築である。

特徴的なデザインとして、上部が半円アーチの2階窓と1階の窓をボーターで囲い一体的に見せている窓の形状、1階玄関ポーチのアーチ型入り口と上部の屋根飾り、モルタルを厚塗りして水平ラインを強調させて力強さを表現している腰壁、2階正面中央部の2つの窓の間の装飾として作られたオーダーなどがあげられる。また上部には旧三野町の町章が置かれている。

内部は、1階部分は現在、三野支所、2階部分は控室を持つ旧議場という2つの空間とそれを繋ぐ階段室により構成されている。1、2階共に、床と天井の仕上げは変更されているが、内部空間としては建築時のまま残されている。1階は付属棟、西棟が増築され、事務室の広さは拡張されている。窓や柱は建築時のものが使われている。2階の旧議場は東面以外の三方は増築されておらず、当時の姿をほぼそのままに残している。

このような大正期の洋風建築の流れを留めた庁舎は、徳島県内において数多く建てられたが、建築当時の姿をほぼ残した戦前の洋風木造庁舎は、県内では他に見ることはできない。



■建築時の三野町役場庁舎



■現在の旧三野町役場庁舎



■1、2階上下の窓を囲うボーター



■上部のコーニスとアーチ型入口、腰壁



■オーダー(円柱)と上部の町章



■オーダー上部(キャピタル)の模様

②-3 武大神社

武大神社は、撫養街道沿いの三野町芝生地区の高台に建立しており、中世の三好郡を治めた小笠原義長の城と言われる「芝生城跡」があり、その城下の商家が並ぶ一画に建立している。

建立年代は不詳であるが、寛保の神社調べに「芝生村牛頭天王韋負」とある。また境内の相撲場に宝暦9年（1759）設立の立石があり、256年前には氏子を挙げて薬師咒を百万遍奉誦したことを立証する立石であるから、270年頃前には薬師咒の牛頭天王社として鎮座していたと考えられる。

神社名は明治元年（1868）、神仏判然令が出された後、武大神社と改称された。名は「武勇以て安息大をなす厄難疫除の守護神社」と意味される。



■武大神社の参道



■拝殿

【まとめ】 吉野川支流河内谷川流域に残る歴史的建造物（三野町）

三野町は、吉野川を前にして水不足に悩まされてきた地域である。現在では県西部屈指の稲作地帯となっているが、その背景には、先人達の知恵と努力によって成し得たものである。それを象徴するのが、河内谷川からの三村用水と溜池であり、また武大神社で行われるお天王はん市で農具市の出店などが、更に屈指の稲作地帯であることを思わせる。

また河内谷川近くの旧三野町役場は、現存する戦前築の町村役場では珍しく、現役の施設として使われている町役場は、おそらくこの旧三野町役場だけと思われる。庁舎建築として戦前晩期の築となるこの建物は当時の徳島の町村役場の秀例として今に伝えており三野町の歴史的風致を形成している。

③吉野川支流河内谷川に見られる活動（三野町）

③-1 稲作

三村用水と溜池によって、三好郡市一の稲作地帯となった三野町は、用水や溜池等の定期的な清掃や水田への水の分配等の管理は、『三野町史』（平成17年発行）によると明治25年1月18日設立の河内谷水利組合によって行われている。

こうした管理のもとで行われている稲作の手順は次のとおり。

①田おこし

冬の間眠っていた田んぼの土を掘り起こし、肥料と混ぜて栄養が多く入った田んぼを作る。

②しろかき

田おこしのあと、田んぼに水を入れて土地とませ合わせ、鏡のように平らにすることを「しろかき」という。これで田植えの準備が完了。

③ 田植え

昔は手で植えていたが、今ではほとんど田植え機を使って苗を植えている。機械では行けない細かいところは手で植える。

④稲が育つまで

田んぼの水の量の調整や、雑草抜き等を行う。

⑤稲刈り

稲が実ったら刈り取りを行う。昔は鎌で刈り取っていたが、現在はコンバインという機械で刈り取っている。

脱穀も、この機械によって行われている。

一本の稲から約70粒ほどのお米が収穫できる。

⑥もみすり

脱穀したもみから、もみがらとお米に分ける。

⑦精米

最後にお米を食べやすくするために、玄米の表面を削り白米になる。



■水田への配水による「よりぬき」※の様子
※「より」とは水を抜くピン。



■田おこしの様子



■田植え



■収穫の様子

月	1	2	3	4	5	6	7	8	9	10	11	12
6月	1	2	3	4	5	6	7	8	9	10	11	12
7月	1	2	3	4	5	6	7	8	9	10	11	12
8月	1	2	3	4	5	6	7	8	9	10	11	12
9月	1	2	3	4	5	6	7	8	9	10	11	12

※ 各月の当番は、1日単位で表示されています。1日単位で表示されている場合は、その日の当番です。1日以上の場合は、その日の当番は、その日の当番です。

■勢力・加茂野宮・芝生地区（旧三村）分水当番表）

③-2 武大神社の秋の例大祭とお天王はん市

武大神社では、秋の例大祭とお天王はん市が行われている。

例大祭は『三野町史』（平成17年発行）に明治3年の『三好郡神社取調指上帳』に祭日は8月18日との記述があるが、現在は10月18日に行われている。

おたひ

御旅は、神輿、屋台、浦安の舞、総代、氏子約120人もの行列であり、屋台の大太鼓を中心に、カネや神輿担ぎがヨイヤサの掛け声よく武大神社から右回りに旧三野町役場庁舎前の行路を巡回する。

お天王はん市は、明治初期、武大神社と改名される以前から毎年、旧暦の10月25日に行われていたとあるように、江戸時代から行われている市で、現在は毎年11月の最終日曜日に開かれている。別名では「農具市」、「相撲市」とも呼ばれ、境内では鎌、ナイフ、なた、のこぎり等の農具の店が軒を並べる。

また境内の土俵では、奉納相撲が行われ赤ん坊の土俵入りや子ども相撲が奉納される。特に化粧マワシを付けた赤ん坊が力士に抱かれ土俵入りする姿の愛らしさや怖さのあまり泣く姿に、土俵を囲む人々は子どもの無事成長を願う思いがみられる。

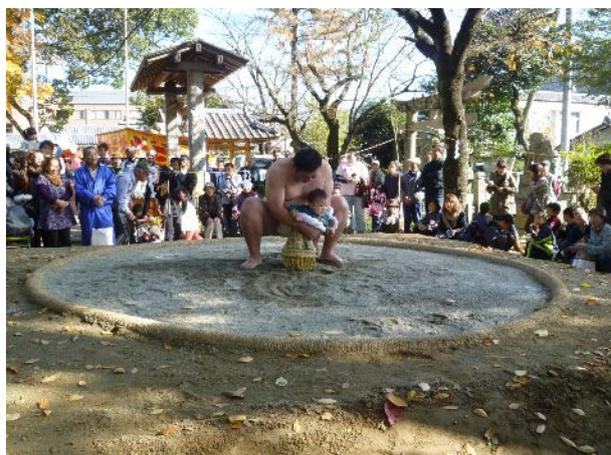
お天王はん市は、米の収穫と麦まきが終わる時期に、新穀の感謝と相撲行事による子供の無事成長、悪霊退散により、来年の豊作祈願と農具の準備を行うため市を開いたものといわれ、農閑期における昔の人々の生活慣習が今に伝えられている。



■武大神社の御旅



■武大神社の例大祭での浦安の舞



■お天王はん市での相撲市



■お天王はん市での農具市

■ 「武大神社の秋の例大祭」の巡行路



⑤ 吉野川支流河内谷川流域に残る歴史的風致（三野町）のまとめ

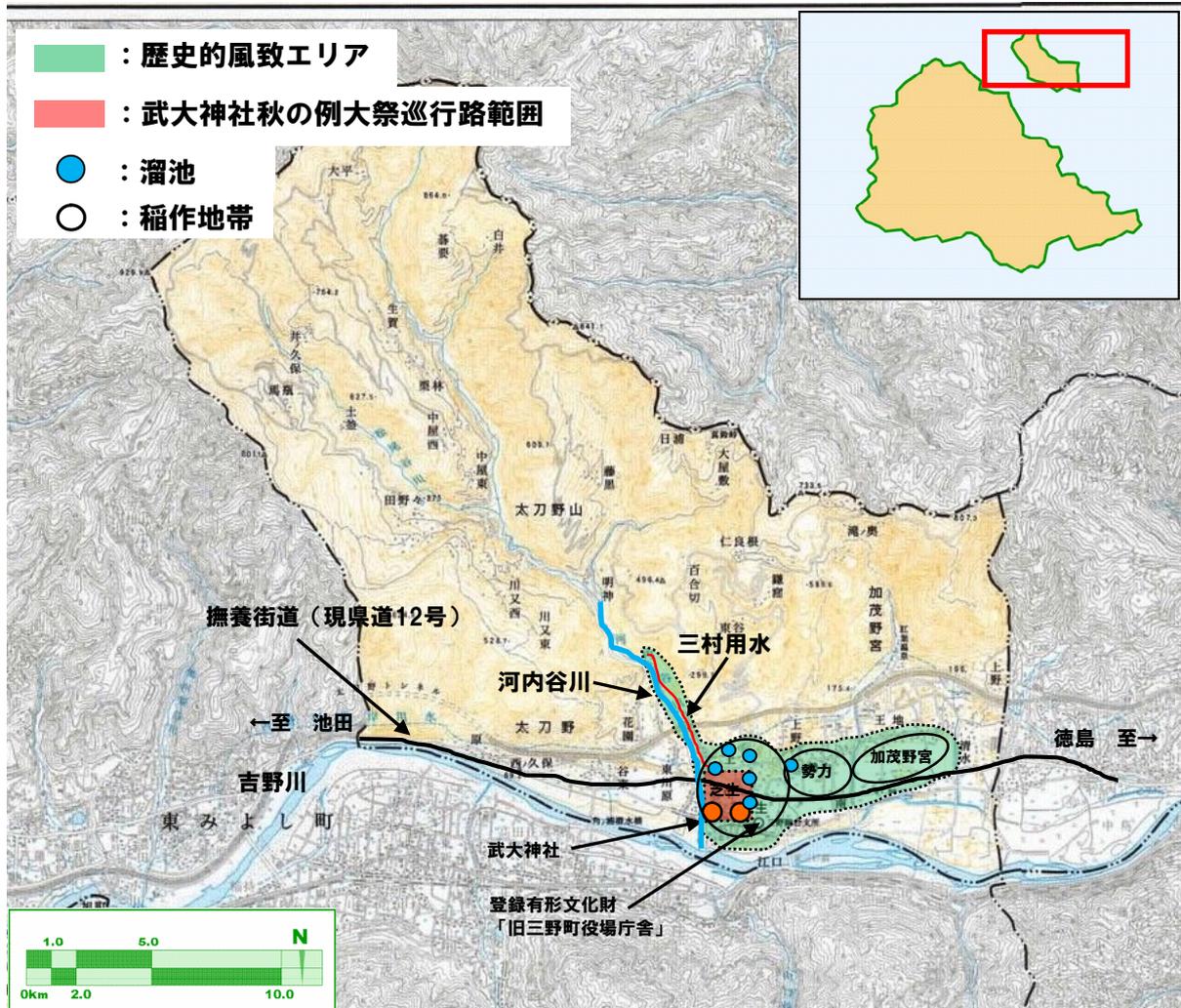


■三野町（健康とふれあいの森公園より展望）

気候は温暖であったこの地域は、旧石器時代に早くも人跡を残し縄文・弥生、古墳・古代にそれぞれの時代に発展を遂げてきた。しかし、水の豊かな吉野川を見下ろして水不足には悩まされ、また吉野川の洪水にも悩まされてきた。水不足に悩まされながらも知恵と努力によって、溜池と三村用水を開発し水田を維持しつつけ発展し、徳島県西部一の稲作地帯を作りあげてきた。この稲作地帯を維持するために、用水や溜池の管理をはじめ、武大神社での祭礼行事をおこなうなどの住民と一体となった活動が、三野町の歴史的風致を形成している。

■吉野川支流河内谷川流域に残る歴史的風致エリア（三野町）

・風致エリアは、家内安全と五穀豊穡を祈願する武大神社の祭礼及び、県西部一の稲作地帯と、それらを支える三村用水及び溜池をエリアとする。



コラム【吉野川のアユ漁】

かんどり舟

三野町から見られる、吉野川らしい風景のひとつに、川漁師のかんどり舟でのアユ漁がある。この舟は、アユ漁の時期（6月1日～12月末）になると多くの舟が、吉野川に浮かんでいるのが見られる。

かんどり舟の特徴は、川の流れに沿うように、上下左右のひねりに対応できるよう軟構造になっている。キールはなく、リブも最低限の使用で、杉の1枚板を多様し作ってある。クギ類は、海の舟は真鍮クギであるが、川舟は錆びて水止めになるように、鉄製のクギを使用している。

人が乗るデッキは、取り外しができるように板を敷き詰めてある。真ん中より少し上の箱には、釣ったアユを生かしておく「いけす」で、底には、タテ状の穴があいて水が出入りする構造になっている。

舟の推進は、竹竿で行う。先端には川底の石を押しても割れないように、木でできている。アンカーは舟の後部に置かれ、後方へ投げ入れられる。

こうした、かんどり舟も近年は減少してきているが、「舟」と「吉野川」と「河原の青石」は阿波の風景の特徴でもある。



■日本を代表する魚「鮎」
石についたコケを食べる習性から、長大な下流域をもつ大陸の河川よりも、日本の川に適応した魚である



■吉野川に浮かぶ、かんどり舟

